

古北歐「異人による蛇神殺し」

としてのバルドル神話

水野和昭

一、「北欧マレビト考」への歩み

筆者は、折口信夫先達の「まれびと」の概念が、確かな手応えをもって古北歐の神話伝説の解釈に援用できるという展望に立つて研究を進めてきた者である。近年、幾つかの論稿や口頭での発表を通じて卑見を提示してきたように、そこから必ずや豊饒なる地平が開示されよう事、もはや疑いの余地もない。ただ当初は文献解釈にもっぱら身を挺していた私は不幸にしてA・スラヴィックの訳著が世に出る最近まで、日本とゲルマンの古層文化を結ばんとされた氏の遠大なる試行を知る機会を得られなかつた。しかし率直に物申すを許して戴けるならば、その偉大なる業績を知らず、孤独なる闇いを強いられた事が反つて幸いした面も多々あつたようである。

つまり私にとっての「北欧マレビト考」の着想は、或る事情で陽の目を見るに至らなかつた試論「北欧の白鳥信仰」(一九八一)⁽³⁾がその契機となつてゐるのだが、当時としては頗るなき掲載拒否と思わ

れた手痛い体験が、反つて「海より渡り来るマレビト」考の深化を自分なりに企てるための原動力を与えてくれたようと思われる。しかしその幻の草稿も「冥界下降」⁽⁴⁾や「太陽舟信仰」(一九七七)、「螺旋形像と迷宮紋」⁽⁵⁾や「渦なす悲哀」(一九七八)、そして本稿で考察の対象とするバルドル神話における「死と再生」⁽⁶⁾そして「海の豊饒神ニヨルズ(原マレビト)と海へと流される穀靈イング」(一九八〇)などの考究を経て、私としては自然な理の帰結として導き出されたものだった。

それ以降の過去の歩みを想起しても、「北欧マレビト考」を構築するためには必要不可欠な「魂と海」(Seele und See)の問題、また海の彼方の常世郷なる「楽園」の問題は、一応の到達点に達している。そしてそれを補完する形で、機会あることに論じている「死と再生のバルドル殺害神話」こそ、実は『北欧マレビト考』の中核をなす性格があるのだという事を近稿にて述べた。その中で概括しておいたように、ひたすら‘Name’(母)を指称する幼児語なる女性を追慕した事が一因となつて殺され、諸神が見守る中、海の彼

方へ葬送されたはずであるのに、いつの間にか地底の死女神ヘルのもとに滞留しているバルドルの姿には、奇しくも、「海原を知らせ」という神命を受けながらも「啼きいさむ」⁽¹³⁾それを拒み、ひたすら「妣の国」(根の堅州国)へと罷り行く事を希求したため、ついに「神逐ひ」させられた須佐之男命の風貌と似通うところがある。

青草を以て簾笠となし、宿を衆神に乞うも拒まれ、霖雨の中、遍歴を重ねるスサノヲをマレビトと見るべきであらう事は、既に折口師によつて提唱され、A・スラヴィクも説かれたが故に殊更ここで付言すべきものはない。またスサノヲについて、「恐らく原初的に

は海の果の根の國から舟に乗り、豊饒をもたらすマレビトであった⁽¹⁴⁾」⁽¹⁵⁾と推定された松前健氏の説もよく知られていよう。氏によると、出雲人にとって、望ましき海上の靈の島であつた根の國も、当時の大和人にとって、汚穢や疾病、罪惡の結集する死者の國と見なされたがため、來訪神スサノヲも結果的に、「大祓の祭式で追いやられる禍事の精靈、スケープゴートと同一視されてしまつた」⁽¹⁶⁾と解される。

既出の小稿で私が展開を試みたように、北欧の光輝くバルドル神も、本来的に罪惡・災厄を免れたマレビト、しかも聖舟フリングホルニ(船首に竜蛇をかざす舟)の意か)に乗せられて葬送され、再生の時に「種まかずとも穀物は育つ」と歌い上げられているが故に、海から來訪しては又そこへ帰去する者(少彦名の如き存在者)であった⁽¹⁷⁾。さらに驚くべき事に、海から渡来せる無垢なるマレビトがバルドルの原態であったにもかかわらず、主神オーリンをはじめとする神々の罪過を背負わされて、まさに「犠牲の山羊」として死

界へと葬る形で神界から追放されているところも、我らがスサノヲとの顯著な類似を示している。詳しくは拙稿に當たつていただきたい。

二、竜蛇殺しの異人

さて肥の河上に天降つたスサノヲが、さらにその河の上流に溯つて、折しも人身犠牲に処せられつた奇稻田娘を救出すべく、八岐大蛇を斬り殺したという神話について、今更語るに及ぶまいが、次田真幸氏の説は注目に値しよう。すなわち氏は、八岐大蛇とスサノヲには水神であり穀神でもあるといった共通した性格が見えることに着目され、また「元來、神の訪れを待ちうけて神の妻となるべき」奇稻田姫が、こゝでは「大蛇に食われるという形に変化してい」⁽¹⁸⁾ものの、この女性を妻とする關係において、八岐大蛇とスサノヲとは「対等の資格」になつてゐると解された。そして、蛇神が容姿端正なる男に変身して妻問う体裁をとつて三輪山神婚説話、および他の類話を勘考に入れられて、「奇稻田姫を妻問う神、すなわち八岐大蛇の変身した人格神が、スサノヲノ命であつた」と、結論を下された。

さて右の八岐大蛇神話もそうであるが、世界に拡播する竜蛇殺しの神話伝説(AT 300)⁽²¹⁾における一連の傾向として、土地を荒廃させる竜蛇(しばしば「水」を独占、またはその逆に暴風雨など「大洪水」の惨禍を人界に及ぼす)を征伐し、犠牲に捧げられた娘(しばしば王女)を救出する英雄・神には、「異人」の性格が濃厚に見受

けられる⁽²²⁾。既に閑散吾氏によつて、八岐大蛇退治と構成上、一致するとして比較考察の俎上にのぼせられたアンドロメダ救出神話も、異常出生の勇者ペルセウスの旅の途上、エチオピアに立ち寄つた時の出来事として語られている。

ここで一稿を設けた事由も、「異人による王女救出の蛇神殺し」⁽²³⁾として、古北欧のバルドル殺害神話を解釈できるという狙いがあつたからだつた。この視点は、ことバルドル神話に関する限り、奇妙にも從来まったく見落されたまま、今日に至つてゐる。卑見に従えば、基本的には「海からのマレビト」なるバルドルが、実はスサノヲと同様、「蛇神」かつ「水神」としての性格を合せ持つており、

それがためにナンナ（母性）の別名⁽²⁴⁾という王女をめぐる確執・

闘争の末、「異人」ホズル（サクソ伝承では「ホテルス」）によって殺されるといった語りの構成を探つてゐると見られる。殊にバルドル殺害の神話を扱つた二大資料、スノッリの『エッダ』（ギュルヴィの幻夢）⁽²⁴⁾49節…以下に略記G異伝⁽²⁵⁾とサクソの『デーナ人の事蹟』

第三書（以下に略記GD異伝⁽²⁵⁾）のうち、ラテン語で著わされ、古典文芸とキリスト教の影響を色濃く受けた後者の方が、右に述べた傾向をより強く打ち出している。すなわちG異伝がまだ残していたバルドルの「マレビト」的な性格を大半、喪失せしめ、「蛇神・水神」性を前面に打ち出す事によつて、「竜蛇退治の民話」へと転化してゆく一步手前に踏みとどまる形となつたものが、サクソのGD異伝である。いわば、そこには原神話の変質が見られはするものの、反つてそれが我々には幸いして、スノッリの伝承が語るを疇躇したバルドルの「蛇神」性、そして何よりもホズルの「異人」性が、露呈

するところとなつてゐるのだ。

残された余白を考えると、私の内部ではほぼ完結を見ている右の論を細部にわたつて、また他地域の竜蛇殺し伝説との比較を広範囲にわたつて考究するゆとりは無い。ここでは対象をGD異伝に絞つて、ホズル（GDでは「ホテルス」）の異人性とバルドル（同じく「バルデルス」）の蛇神性について、わずかに点描を与える以外に手だては無いようである。

三、ホテルス対バルデルスの求婚闘争

奇稻田姫を妻となさんとする八岐大蛇とスサノヲの闘争説話といつた固式は、GD異伝にも見られる。まずはその極く大まかな粗筋

を紹介しておきたい。左記においては簡略を期さんがため、ホテルスをH、バルデルスをBと略称しておく。

(1) 父なるスウェーデン王ホズブルッドが、ヘルギによつて殺され、Hは少年期よりノルウェー王ゲヴァルの膝下にて養育される。

(2) やがてHは若くして義兄弟や同輩の者たちに力と技においてより凌ぐこととなる。殊に「水泳 弓術 拳闘」などの武芸、また「堅琴 弹奏」の楽才に秀ず。(3) デヴアル王の娘ナンナ、数々の偉業を成すHに、心惹かれるようになる。

(4) 偶々、オージン神の息子たるBが、ナンナが水浴びする様を見てしまい、激しき恋の欲情に駆られ、いつしか恋の怨敵Hを殺さんと決意す。(5) 折りしもH、狩りにて道に迷い、森界の乙女たちと出

会う。彼女らは、戦いの勝運を司り、自らのお気に入りの勇者には加護を与える事が出来ると己が神威を説いた後で（したがって死と戦いの乙女ヴァルキューの風貌あり）、Hにとつては義理の妹たるナンナに對してBが恋の情欲に駆られている事を告げ知らせ、異々も半神、神の胤なるBと事を構えぬよう忠告す。(6) Hが耳にしたその忠告は、幻術の中で聴いた事だったと悟るわけだが、帰城したHは事と次第を養父ゲヴァルに語ると、直ちに王女ナンナへの求婚を申し出る。

(7) 王、直ちに同意せず。鉄をも通さぬ強靱なる肉体を備えたBも、既にナンナに求婚しており、その激しい怒りを買うを怖れていないので。ただBと対決し得る唯一の「剣」（紛れもなく蛇神退治の武器）と所有主の富を増殖する魔法の「腕輪」（婚資金のシンボル）が、森の怪人ミミングのところに所蔵されている事を教示。そこへと至るには、尋常の者には踏破し難き道なき路程、極寒の凍つつく山々を馴鹿（橇）の隊列を組んで行かねばならぬ等々と説く。(8) Hは王の教示を忠実に守り、極寒のさい果ての地への旅を成就。して夜は不安・焦燥の念に駆られつつも、昼には食糧獲得（肉体力の保持）のための「狩獵」をなしつつ、ミミング出現の時を待ち構える。(9) ようやく或の夜、極度に疲弊を来たしつつも不寝番を続けていると、洞窟の住人ミミングの「影」⁽²⁶⁾が、Hの幕屋に忍び寄つて来る。そこをすかさずHは、槍で小突いてミミングを脅し、身動き取れぬようにして、目的の魔剣と腕輪を奪取す。(10) Hは喜び勇み、意氣揚々と「祖国」(patria)であるは「生れ故郷」のスウェーデンか）へと帰る。

(11) サクソニー王ゲルデル、その宝物獲得の噂を聽きつけ、力ずくで奪わんものと海戦を準備す。(12) 「予言力に長けた」ゲヴァル王は、それを察知してHを召喚し、ゲルデルとの海戦に勝利する秘策を授ける。(13) Hとその従軍兵たちは、ゲヴァル王より下賜された必勝の秘策を忠実に守り、ゲルデル軍を打ち負かす。ゲルデルは和睦を申し出、H寛大にもそれを受け入れる。

(14) ハルガランド（ノルウェー北方）の王ヘルギが、ゲシル（フィン人とラップ人の王）の娘トーラに再三におよび求婚するも、言葉の才に欠け承諾が得られず。Hはヘルギの依頼により、その代理人としてゲシル王のもとへ出立。そして「卓越した弁術」によつて王女トーラとヘルギの結婚を奨め、父娘の承諾を勝ち取る。(15) この間、すなわちHの不在中に、Bはゲヴァル王のもとへ出掛け、王女ナンナへの求婚を申し出るも、ナンナ自身の「巧みな弁術」によつて固く拒絶される。(16) H対Bの海戦はじまる。オージンやトール等の神々がBに加勢したが、トールの武器なる棍棒(clava)がHによつてへし折られ、神々の軍が敗北。Bは恐れをなして逃げる。(17) しかしその戦いでゲルデル王は戦死を遂げ（何者かに殺され）、Hはその死体を船内に築いた薪の上に安置し、だびに付して手厚く葬る。

(18) やや時を経て、Hはゲヴァル王にかねてより念願のナンナへの求婚を申し出、正式に結婚。(19) Hは祖国スウェーデンへ花嫁とともになつて凱旋。勝利者Hが人々の賞賛の的になつたのに対し、敗走者Bは嘲笑の的となる。(20) Hは喜び父王の徳望のお蔭もあつて、人望にも恵まれ支配者となる。

(21) 敗北の憂き目に会わされていたBが、今度はHを破り、Hは

義父ゲヴァルのもとへ敗走のやむなきに至る。(22) 勝ち誇るB、戦いで喉が渴いた従軍兵のため、「地中深く穴を穿ち、地下水を掘り当ててやる」。兵たち群がつて湧き出た水を飲む。(23) 戰いには勝ったものの、Bは夜毎ナンナの姿をした幻影に悩み苦しみ、ついにその病いが嵩じて「歩行困難」に陥る。このためBは移動する時は馬車に乗るを常とするようになる。

(24) ウップサラ近郊にて、神々の代理執行人（祭司長）フリヨ（大帝豊饒神フレイを想起）なる者が、「実に嫌悪すべき」（伝承の記録者サクソ自身の言葉）人身供犠を行つていたという叙述が挿入される。

(25) Hはデンマークを一時統治す。その兄弟アティスルにスウェーデン統治を委嘱。しかしアティスルは不意に死んでしまい、両国はHの一轄統治となる。(26) またもB、船団を率いてシェラン島（デンマーク）へ上陸。Hの不在中（スウェーデンにいた）の出来事であつたが、急速にBの名声高まる。王にも推挙されんほどの勢い。慌ててとつて返したHと、支配権をめぐつて凄じき戦いが始まる。(27) その結果はHの敗北。ユトランドへと逃げ、村々をあちこちとさ迷う。

(28) 冬も過ぎ、ほうほうの態でスウェーデンへ帰った時には味方も無く、Hただ一人だった。(29) 手痛い敗北を二度も喫したHは、完全に自信喪失。諸侯に別れを告げ、「人里離れて彷徨を重ねる」。(30) こうしてさい果ての地を遍歴し、とある森に至つた時、Hは洞窟に住む「不思議な乙女たち」（以前Hに『いかなる攻撃にも耐え得る戦衣』を与えた者）と付言されている）に出会い。彼女らは、Bが

強力なる秘密がある「特殊な食物」に潜む事を告げ、それを奪えば勝利を手中におさめられようと言つて、Hを激励。

(31) その言葉に勇氣百倍のHは、再びBに對して開戦の火ぶたを切る。一進一退の互角の戦況が続く。(32) ある夜、不安感から寝つかれぬHは、誰にも気付かれずに敵陣偵察に赴く。(33) すると「三人の乙女」が例の「B秘蔵の食物」を携えて、陣営から立ち去つた直後であった。(34) Hは急いで、「水滴が落ちた跡」(roscida vestigia)をたどり行き、女たちの居場所を探り当てる。

(35) 女たちに素性を尋ねられ、Hは「旅の樂人」であると身分を偽る。(36) それが嘘でない証拠に、と言ってHは堅琴を弾奏し、魅惑的な樂音を奏でて見せる。(37) 「三匹の蛇」が銅われていた。その蛇の毒がBの食物に滴下するところとなつておらず、いわばBが強靭なる秘密はこの「蛇の毒を混入した食物」であった。(38) 女のうちの一人が、Hに「宴」(cpulum)への列席を許し、すんでの所でHにその秘法の食物を与えるとするところだつたが、最年長の女が、Bの「敵」(Hostis,『異人』)をこれ以上強力にしてはならぬと、それを制止す。(39) その來訪者（H）は、あくまで自分はHではなく、「Hの仲間」だと嘘ぶく。

(40) * * * 原テクストに脱漏箇所。

(41) なぜかその「同じ女性たち」態度豹変。「心優しく氣前よく」その男Hに「精巧に作られた輝く帶」(cingulum : 「劍帶」か)と「勝利を約束する帶」(zona : 「女の一人が付けていた飾り帶」か)を贈り与えている。

(42) Hは道を引き返すと、途中Bに出会い、いわば「一対一の対

「決」が初めてここで実現す。HはBの「脇腹を突き刺し」(具体的な殺しの武器は明示されず、ただ‘hausit’[突いた]とあるから刀剣の類いか)、致命傷を負わす。⁽³⁾ Hの従軍兵たち狂喜するも、デーン人たちBの悲惨事を嘆く。⁽⁴⁾ 翌日、己れの死期近きを悟り、Bは戦場に担架を運ぶよう命ず。⁽⁵⁾ 次の夜、死女神(原典ではラテン式にプロセルピナ)あるから、「死界へ赴き、また蘇生する豊饒女神」と解し得る)が、Bの夢枕に立ち現われ、三日後にBを「抱擁」すると宣言。⁽⁶⁾ その夢見の通り、Bは三日後に激痛に苦しみつつ死す。

⁽⁷⁾ 徒士たち、「王者にやむわしき葬送をもひて」(regio funere)、墳丘を築いて手厚くBを葬る。

四、蛇神に魅入られた王女 ——人身犠牲の習俗——

既に了解いただけたと思うが、構成要素が幾つも絡まり合っており、到底一稿にて論じ尽す事は困難である。しかしもう炯眼なる読者にあつては、Hの「異人」性、Bの「蛇神」性を見抜かれたであろう。いわば当伝説は、「王女ナンナをめぐる異人ホテルス対蛇神バルデルスの闘争譚」をその中核となし、勇者ホテルス「単独型」の竜蛇退治(AT300)を語る面では、八岐大蛇・アンドロメダ型と類似しているが、蛇(三四)を飼う三人の乙女(元来は「掠奪されし三人の王女」か: AT301)の条りに着目すれば、甲賀三郎型との相似も浮上してくることになった二重構造を成しているのである。

ただし先にも概括したように、「海からのマレビト」がバルドル神の原態であるとしても、このGD異伝においては、異国の王子H対「半神」Bとの「海戦」(⁽⁸⁾と⁽⁹⁾)を語る事によって、バルデルスは「海から来襲する邪神」として捉えられている。この意味の変換を可能にする一つの接点は、海へと葬送され行くバルドルを載せた船の名前そのものであろう。何となれば聖舟フリングホルニのhringrとは「舟」の他に「剣」と「蛇」の意味も合わせ持つ名であるから、明らかに我らがスサノヲ伝承(蛇身を斬った「蛇の轄鉤」と蛇尾から出現した「草那藝の大刀」)等々とも共通した「剣・蛇」の連合がみられるからである。原スサノヲが海からのマレビトであるという松前説と、スサノヲも八岐大蛇も「蛇神・水神」といった共通した性格を有していると説かれた次田説を統合すれば、類似の信仰背景を基に成り立った古北欧のバルドル殺害神話において、「海から舟(蛇号)に乗って渡り来るマレビト」なるバルドル、バルデルスが「王女を掠奪せんとする蛇神・水神」として殺される事が語り出されているとしても一向に不思議ではない。すなわちスサノヲ的な特性を持つバルデルスが「死と再生」の象徴としての蛇と緊密に連合されることによつて、GD異伝はスサノヲ伝承に比して、機能的には「殺す者」と「殺される者」の立場が逆転していると見なしてもよい。言い換えると、王女獲得の闘争の結果、異人によつて殺された「海からのマレビト」を物語るこの古北欧伝説から、わが国の八岐大蛇殺害伝説への逆照射を加えれば、「神逐ひ」されて霖雨の中をさ迷うスサノヲは、「異人」として出雲のさる河に天降⁽²⁸⁾の相似も浮上してくることになった。

内在する「マレビト」を討ち殺したのだと解し得よう。

「年毎に来たりて」童女を呑み込む八岐大蛇に、奇羅田姫が犠牲として捧げられる神話は、「地と水の精靈」たる蛇と「稻の穀靈」たる処女の神婚を物語つてゐる。従来解されど、⁽³³⁾古北歐のバルデルスの王女ナンナ（または三人の処女）への求婚の失敗譚（⁽⁴⁾と⁽⁸⁾とに対比的な⁽⁵⁾）も、類似の信仰を背景にして成り立つているのだろうか。もはや言うまでもなく、バルデルスの蛇神・水神性は、地中に潜入して地下水を掘り当てる（⁽²²⁾）、恋の懊惱（すなわち間接的な婚姻）によつて「歩行困難」に陥つたこと（⁽²³⁾）、また強靭なる肉体（不死性）の秘密が蛇の毒を食する事にあつたこと（⁽³⁷⁾）等から明日である。またこの意味において、挿入的に置かれた「大地豊饒祈願の人身犠牲」（⁽²⁴⁾）の記述は、すこぶる重大である。蛇神に魅入られた王女にまつわる伝説は、こうした「豊饒祈願の人身犠牲」の習俗を反映してゐるのであろう。

バルデルスが水浴中の処女ナンナを垣間見て、それを愛し、結果的には殺されるといった物語構成になつてゐるが、これは別稿にて記したように、狩獵の途中道に迷つた王子アクタエオンが狩獵女神・月女神ディアナ（アルテミス）の水浴を偶々のぞき見たため、うらみ殺されてしまふ古典神話と酷似してゐる。また当然、女の「見てはならぬ」裸身（本性）を覗き見たため結婚が破綻をきたす一連のメルシーナ型伝説に組み込まれるべきものが、サクソのG D異伝ではある。ただしでは、半神バルデルスが「見た」ことになつてゐるが、「狩りをしていて道に迷つた者」（⁽⁵⁾）そして「狩りをする王子」（⁽⁸⁾）の特性を有する者はバルデルスに非ずしてホ

テルスである。

既に別稿に展開を試みたように、スノッリのG異伝のバルドル殺しに、陰に陽に関与する母神フリッジ、妻神ナンナ、そして実に狩猟女神スカジ（「陰影」の意）の三女神は、新月、満月、暗月のいわば月の三相を象徴しており、無論その本源は一つである。したがつて月女神を「見た」ため殺された者は、表面的にはバルデルスとなつてゐるが、原型的には「蛇を飼う三人の処女」（生と死を司掌する三人の運命女神の面影を秘めた月女⁽³⁷⁾・ナンナの分身）と相見てその本性を見てしまったホテルス自身であつたと解し得よう。事実、神バルドルを殺したホズル（ラテン名のホテルスに相応）は、「矢を射る童神」ヴァーリによって復讐され殺されたことが、後日譚として語られている。

いわばスサノワの神話と同様にして、異人（森をさ迷う狩獵者・旅する楽人）ホテルスは、蛇神バルデルスを殺す事によつて、結果的に自分自身の「マレビト」性を討ち殺したこととなるのだ。言い換えると、蛇神殺害を成就し、最終的にナンナへの求婚闘争に勝利をおさめ、つづがなく「結婚」（日常）生活を送ることが出来るようになつたホテルスは、一所不住の遍歴を旨とする己が「マレビト」性の大半を喪失する事態をも惹き起こした。ここにおいて「海から」のマレビト（バルドル神）の殺害者ホテルス・ホズルは、主神オージンが異國の王、女、リンダとの間にもうけた「矢を射る幼童」ヴァーリ（またはG D伝承のボー）、すなわち半ば以上は自己の分身たるべき者によつて葬り去られねばならぬ必然性があつたとも言える。

五、貴種流離の異人

もつともホテルスのマレビット性の喪失は、バルデルスとの緒戦に勝利し、ナンナと結婚して祖国へ凱旋し、やがて支配者の地位におさまった時点（19・20）で既に始まっている。いわばこうした人生の頂点に立つ以前のホテルスは、「異国出身の除外者」であつて「弓芸」に秀で、「森をさ迷う狩人」でもあり、また秘剣と腕輪の獲得のため「凍てつく山々を踏破する旅」の難行に耐え得る者であった。言わば、バルドル神が海からのマレビットであるのに対し、ここにおけるホテルスは「山からのマレビット」であるといった図式が成立つようである。残された余白では、この推定を補強すべく努めてみよう。

それはさておき、ナンナと結婚して祖国に定住したこと契機として、ホテルスの転落が始まっている。まずはこの事実を見逃すべきではあるまい。すなわちその後は、敗戦に次ぐ敗戦（21・22）を蒙り、村々をさ迷った後、ついには自信喪失のあまり「たつた一人」で人の通わぬ国々を「彷徨」し続けている。しかし逆の見方をすれば、新たに勝利者として復帰するためには、このような試録の過程を経て、自己に本有の「貴種流離のマレビット」性を回復すべく、その姿へと変身をとげること（27・28・29）と（34・35）が是非とも必要であった。

ちょうど甲賀三郎の異国でのさすらいや光源氏の「犯し」を基因とした須磨流竄などにも、荒木博之氏が説かれたところの「神性復讐」（やはり東方遠征譚の伝承があり）の姿と、このホズブロ

元のための道筋⁽³⁹⁾としての貴種流離のテーマがあつたように、ホテルスも正式な結婚（？）であつたにせよ「犯し」た女性のもとをいつたん離れ、祖国から離脱して、再び貴種流離の境遇に自らを置かねばならなかつた。またこうしてひとたび確立した王者の地位を投げ棄て、独り身の流寓を重ねて勝利者への変貌をはからんとするホテルスにとって、最終的には、戦衣を下賜した森界の乙女（30）や勝利を約す帶を受けた三人の処女（41）のごとき、いわば北欧版「妹の力」の加護が不可欠であったようである。古北欧において、古日本に勝るとも劣らぬ「妹の力」の信仰⁽⁴⁰⁾や「貴種流離」譚があつた事については、つい最近の日本口承文藝學會⁽⁴¹⁾や日本民俗學會⁽⁴²⁾で口頭にて発表した。ここでは詳論する余白が無いので次の機会を俟たれたい。

六、弓射る狩猟神のさすらい

さて（1）を見る限りは、あたかも父王が殺された事が要因となり、ホテルスが異國へ養子に出されたかのような筆致となつていて、ホテルスが同じサクソのG D第二書V-5節の記録によれば、「版図の拡大に意欲的な」父王が「東方遠征（異族との戦闘）」に出かけ、諸民の間で凄まじい殺戮を重ねていた時、すなわち父の存命中の出来事となつていて。いずれにせよ養子に出された明確な事情は語られていないが、神々と敵対的な巨人族の国々（殊にオージン・ロキの分身と解されるべきウートガルザロキの国）を來訪する「荒ぶる雷神トール」（やはり東方遠征譚の伝承があり）の姿と、このホズブロ

ツドの風貌が似ている事は、もっと注目されて然るべきであろう。

すなわち戦う雷神トールには、「狩猟神」「スキーカーをはぐ神」、そして「イチイ（弓矢の原木）の谷」に住む「弓射神」として名高いウルという「継子」があつたが、このウル神の特性は、GD伝承におけるホテルスの性格と非常によく似ているのである。いわば幼少期から「養子」という異人的な境遇におかれながら、やがて並外れた武芸の才、殊に「弓術」に卓越した才を示し、王女ナンナの愛を勝ち取った（美貌の持ち主か）ホテルスは、ウル神と同様、「狩りを好む者」（5）（8）であった。また神劍と腕輪を奪取せんがための試練の旅（花嫁獲得と蛇神退治を成就する通過儀礼）をなす時、彼は「雪氷で凍てついた山々の尾根を全速力で駆け抜けられるように」という王の教示に従つて「馴鹿（橇）」の隊列（チーム）を編成して出立している（7）（8）。王宮内での「滞留」生活から、このように単身、危険を冒して「極寒の旅」へと身を投するホテルスは、まさに貴種流離を実践することによって、スキーに乗る冬の狩猟神ウル（天の輝き）（5）（8）の意への変身を企てているのだ。こうして冬の山々をさすらつた後、目的地にて星はひたすら「狩猟」に打ち興じて日々を送り、ミミング出現の時を待ち構えるホテルスであるが、ここに「山からの異人・マレビト」の原姿を読みとる事は、決して穿ち過ぎではあるまい。

スノツリは雷神・戰神トールの「継子」たるウル神についてこう記している。「比肩し得る者なき優れた弓射者であつてスキーカーの名手。また容貌も美しく戦士としても傑出している。一対一の決闘の際にはこの神に祈願されるがよい」（「ギュルヴィの幻夢」31節）。

いわば本来、ウル神の属性を備えていたホテルスは、酷寒（極北）の「死界」表象が混入か）の旅の試練を経て、ますますバルデルスとの一対一闘争に勝利し得る勇者へと、己れを昂めていたと見ることが出来る。この意味において、故国への帰還直後に勃発したゲルデル王との「海戦」（13）での勝利は、バルデルスらの神々との「海戦」での大勝利（16）の先触れとなつており、またヘルギ王の代理人として、王女トーラへの求婚に成功したという挿話（14）はホテルス自身の花嫁ナンナ獲得（18）へと至る伏線となつていて、ホテルス「自身の花嫁ナンナ獲得（18）へと至る伏線となつていて」とを実証する事件が、試練の旅からの帰還後に生じているのである。甲賀三郎譚について荒木博之氏が言及された「貴種流離譚に特有の死と再生の円環構造」（48）の概念は、まさに古北欧の蛇神殺しの勇者ホテルス「流浪の旅」にもほぼ当てはまると言える。

七、弓矢と堅琴そして「妹の力」

さて周知のようす、スノツリのG異伝のホズルは、智恵神ロキがヴァルハラの西（死界の彼方）より持ち帰った寄生木を「射る」（原語 *skjóða*）ことによって、バルドルを死に追いやつている。「巫女の予言」（31—32節）でも、「大そう美しき寄生木」が「恐るべき災いの飛矢」になり変わって、ホズルがそれを「射た」と明記されている。

したがつて、サクソのGD異伝では、蛇神化したバルデルスの脇

腹を「突いて」半死の重傷を負わせたとなつてはいるものの、バルドル殺しの原神話にあつては、「弓射による蛇神殺害」が本来の形であつたのではないかと推定され得る。⁽⁵⁰⁾ 賢明なる読者は、狩獵神ウル

とも似通う「射手」ホテルスの姿が、GD異伝の後半部に至るや、影も形も無くなり、殺しの直前では「堅琴弾きの吟誦詩人」と変身を遂げてはいる事実に気付かされるであろう。しかし起点と終点におけるホテルスのこうした異質性も、「弓弦」と「琴の弦」でもって象徴的に結びつけられているかに見える。複雑な要素が錯綜した当神話伝承の言わば「語りの縦糸」ともおぼしき「弦」には、荒ぶる魂(Fygg)を鎮める呪術的な意味が込められていたのである。

例えれば、戦いで捕虜となり、両手を縛られたまま「蛇牢」に入れられたグンナル王は、女グズルーンより渡された「堅琴」を足指でいとも巧みに弾奏することによつて、一匹を除く他のすべての蛇を「眠らせて」(無論、「仮死」の暗示)その攻撃を防いだと伝えられる(『ヴァオルスンガサガ』39章)。

旅の樂人に身をやつして、ホテルスが三人の女の匿われた隠れ家を訪れた時、その場にいた三四の毒蛇の攻撃を何ら受けなかつたのも、「蛇殺しの異人」の本性よろしく見事なる堅琴弾奏をやつてのけたからであろう(55 56 57)。そしてその堅琴の妙音が、ひいては蛇の世話をさせられてはいたかにみえる三人の女たちの態度をも豹変させ(58 から41), いわば宿敵バルデルスの「妹の力」として現われての彼女らをホテルスの意のままに操り、己が圈内に引き入れることによって勝利を掌中におさめたのだ。当伝説の序章部に、ホテルスの堅琴演奏が、聴く者の胸中に「喜、悲、憐み、憎悪など彼

の意のままの氣持」をかき立てる事が出来たと明記されている事も右の推定を裏付ける。

無論、蛇牢へ入れられたグンナル王の話は、スサノヲ命の女スセリ姫と目合ひ(婚)して「蛇の室」や吳公と蜂の室へ入れられたオホナムチ神の伝説を直ちに想起させる。かの神がこれら婚姻にともなう試練をいずれも妻スセリ姫より授けられた「比礼」(装飾風の織布)を打ち払つて凌いだと語られるところ等も、グズルーンより手渡された「堅琴」、また蛇飼い女たちから授けられた「勝利の帶」(41)、あるいは「攻撃に耐え得る戦衣」(80)等々と機能的に類似した意味が込められていよう。いずれも勇者・神が「女の呪力」を借り受け、蛇(神)を調伏しているのである。

事のついでに付言すると、大野原に射込んだ「鏑矢」を探すよう命ぜられ、野に入つたところを周囲に火が放たれ、焼け死ぬところを危うく難を逃がれた(地中に隠れる・「死と再生」)オホナムチが、スサノヲ大神の「生大刀」「生弓矢」と「天の沼琴」を盗み持ち帰帰つて國土經營に着手した云々と語られているが、ここでも荒魂を鎮める呪具として「弓矢」と「琴」が連合されている。いわば八岐大蛇退治を成就して奇稻田姫を花嫁として獲得したスサノヲ命が、この根の堅州国においては「女を占有する結婚妨害者」として半ば蛇神化されており、「來訪者」オホナムチは数々の試練を蒙りつつその荒魂を鎮め、ついに「女を掠奪・救出する者」として現われているようである。

八、結語——異人ホズルの二面性——

蛇神退治の異人ホテルスに、「山界の弓射る狩獵者」と「旅する堅琴奏者」の二種の側面が浮上してきたものの、基本的には畏怖すべき或る女をめぐる蛇神討伐または魂鎮めの意味が込められた二種の貴種流離譚がその根底にある。いわば「神聖なる來訪者」たるホテルスのこの二面性を今後の研究の便宜をはかるため、それぞれホズル(a)、ホズル(b)と命名しておきたい。現在、手元にある研究の指針に従えば、ホズル(a)は、「遠矢射る」太陽神アポローンの「幼童期」の弓射による大蛇ピュトン（アポローン神の母レトーを迫害）退治と関連付けて論及できる。またホズル(b)は、「蛇」に咬まれて冥界へ先立つて行つた愛妻エウリュディイケーを連れ戻すため、やはり邪靈を調伏し得る「堅琴」を携え、冥界下降を行なつたオルフェウス（及びその「死と再生」の教義）との連闇をもつて論じるべき筋合のものである。しかし如何せん、余白はどうに尽きてている。

思うにこの小稿で語り得なかつた事はあまりにも多い。たとえば古ゲルマンの竜蛇退治の他の勇者（シグルズ、シグムント、シグフレーズ、レグネル、ベーオウルフ等）、あるいは他の国々の神話における神対竜蛇の闘争譚（ゼウス神対テュポン、インドラ神対ヴリト、バール神対ヤム、マルドウク対ティアマット等々）についても一切、割愛せざるを得なかつた。だが少なくとも本稿を通じて、G D 異伝のホテルスが、実は一連の蛇神退治の異人のひとりたり得る事、しかもどうやらこの伝承の背景には、水界を支配する「海のマ

レビト」に對して誅伐^{ちゅぱ}を加える「山界の異人」といつた、比較的単純な構造が隠されているらしき事は、お認め戴けたであろう。いわば我が国の海幸彦対山幸彦の闘争譚などとも比較研究を進めつつ、今後は更なる論の深化が望まれるのである。

* 本稿は、昭和六十一年度日本口承文藝學會（六月七日、於岩手県遠野市）で「北歐の『異人による王子・蛇神殺し』伝説」と題して發表したものの一部を敷衍してまとめたものである。

【註】

- (1) (i) 水野知昭『北歐マレビト考』への展望（第28回日本大學工學部學術研究報告、一九八五、十二月七日）。(ii) 水野「神々の犠牲者としてのバルドル——『北歐マレビト考』への序章」『日本大學工學部紀要 分類B』第27卷（一九八六a）97—112頁。(iv) 水野「バルドル殺害者ロキの三態」『日本アイスランド研究会報5』（一九八五）（一九八六年五月刊行）1—7頁。(v) 水野『北歐マレビト考』（第24回日本民族学会、一九八六、五月二十五日）。(vi) 水野「北歐の『異人による王子・蛇神殺し』伝説」（昭和六十一年度日本口承文藝學會大会、一九八六、六月七日）。(vii) 水野『古北歐の貴種流離譚』（日本民俗學會・第38回年会、一九八六、十月五日）。
- (2) A・スラヴィイク『日本文化の古層』住谷一彦、クライナー・ヨーゼフ訳（未來社、一九八四）、殊に第二章、第四章。

- (3) 『日本大学工学部紀要』として提出（九月）すれむ、「いまだ論熟さず」という査定にて掲載拒否。海神ニヨルズと死界の乙女ヴァルキヨーレの基底に潜む白鳥信仰を抉り出し、白鳥の渡りの習性と太陽の「死と再生」の信仰を絡めて、私としては初めて『北欧マレヒト』考の着想を提示す。
- (4) (1) 水野「*Beowulf* の眞界〔降譯〕その起源への一考察—」『試論』第17集（東北大学英文学研究室刊、一九七七）17—32頁。(2) 水野“*Beowulf* の儀礼的解釈”（日本中世英語英文学談話会 一九七七・十一月）
- (5) 水野「螺旋文の意味するもの」同人誌『H·ボス』第3号(「H·ボス」同人会、一九七八b) 2—12頁。
- (6) 水野「*Beowulf*における《渦》なす悲哀」『文化』第41巻・第3・4号（東北大学文学会 一九七八a）77—93頁。
- (7) 水野「ペルドル神話における死と再生の儀礼」『H·ボス』第5号(「H·ボス」同人会、一九八〇) 54—73頁。
- (8) 水野“北欧の豊饒神 Njörðr やして Ing の系譜”（第23回日本大学工学部学術研究報告会 一九八〇・十二月(十一日)）
- (9) 水野「風、海そして火の神ニヨルズ」『H·ボス』第7号(一九八二b) 36—55頁。
- (10) 水野「古ゲルマンの樂園の原風景」『文化』第47巻（東北大学文学会 一九八四b）1—23頁。
- (11) 註(1)の(1)～(7)。その他、水野「ペルドル殺害神話の形成—大地母神と運命女神崇拜—」『H·ボス』第6号(一)
- 九八一b) 26—46頁。
- (12) 註(1)の(2)を参照。
- (13) 註(1)の(2)109頁。
- (14) 折口信夫「国文学の発生（第三稿）」『折口信夫全集』第一卷（中央公論社 一九七五）12—15頁。
- (15) 註(2)124—125頁。
- (16) 松前健「日本神話の新研究」（桜楓社 一九七一）160頁。
- (17) 松前健「日本神話の形成」（瑞書房 一九七〇）466頁。
- (18) 註(1)の(2)108—109頁。
- (19) 註(1)の(2)101—105頁。
- (20) 次田真幸「日本神話の構成」（明治書院 一九七一）192—194頁。
- (21) Arne, A. / Thompson, S. ‘The Types of the Folktale’ *FolkComm.* No. 184 (1973) pp. 87—90,
- (22) 尚、古北欧の「異人」論に(1)とは、水野「旅する客神ロキの神話—その(1)—」及び同名論文「その(2)」を参照。『日本大学工学部紀要 分類B』第28巻(一九八七)「その(1)」89—108頁、「その(2)」109—128頁。
- (23) 関敬吾「八岐の大蛇の系譜と展開—日本昔話の南方との関連—」『日本民族と南方文化』所収、金闇丈夫博士古稀記念委員会(編)（平凡社、一九八〇）599—646頁。殊に614—615頁。
- (24) Holtsmark, A. og Helgason, J. (utg.) Snorri Sturluson *Eddas* (Dreyers Forlag et al., 1971)
- (25) Olrik, J. & Ræder, H. (eds.), *Saxonis Gestae Danorum*,

Tomus I(Hauniae, 1931) Liber Tertius. 尚、いわゆるG異伝 AWD異伝のバルドル神話を原典に忠実に比較された菅原氏の論文は、従来の説から大きく逸れてはいない。菅原邦城

「スノツリとサクソにみるバルドル神話」『IDUN』VI (1982) 3—22頁。

(26) 『ミングとの「影」の解釈については、拙稿参照。註

(1) の[2]105—106頁。註(1)の[2]4—5頁。

(27) Hostis 「畏怖すべき異国人、敵人、客人」。岡正雄「異人その他の—古代経済史研究序説草案の控へー」『民族』3卷6号

(一九二八) 79—119頁。殊に104頁の有名な議論を参照。しかしながら hospitality (客人款待) と hostility (敵意) なる

英語が、ともに host (岡正雄:「…客人、主人等を全体的に意味した」語) といふ語に、語源を有するという説明は、誤りである。正確には第一と第三の語が、ラテン語の hospes

(「主人、客人、客の仲間、異邦人」) に、第二の語は、同じ ラテン語 hostis (〔異人、敵人〕) に、敢えて言うなら「語基が由来している」と見るべきである。

(28) 荒木博之「甲賀三郎譚と熊のシヨン」『昔話伝説研究』第七号 (昔話伝説研究会 一九七八) 1—11頁。いわばりの視点

かの「熊の息子」説話 (F. Panzer, 1910) の類型として G D 異体を考究出来るのはだが、限られた余白では如何ともし難い。

(29) Jan de Vries, *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch* (E. J. Brill, 1962), s.v. "Hirngr".

(30) 他の「剣・蛇」と「雷神」の連合の諸例については次著を

参照。大林太良／吉田敦彦『剣の神・剣の英雄』(法政大学出版局 一九八一) 161—166, 181—194頁その他。

(31) 註(16)同頁。

(32) 註(20)192頁。

(33) 日本古典文学大系 67 『日本書紀 上』(岩波書店 一九六七) 121頁の(注21)。

(34) 無論、倭建の命「足え歩かず、たゞたゞしくなりぬ」の情況と酷似せるものとして、別稿を設けて論ずる用意がある。

(35) 既出の稿にて言及済み。註(1)の[2]107頁。

(36) 註(1)の[2]108頁。

(37) 古ゲルマンの月崇拜については拙稿参照。水野「ゲルマンの宇宙創成論における月神崇拜」『日本大学工学部紀要 分類B』第22巻 (一九八一a) 95—110頁。

(38) 『詩文のヒッダ』所収の「巫女の予言」(32節)「バルドルの夢」(11節)、「ヒュンドラの歌」(29節)。『スノツリのヒッダ』中の「ギュルヴィの幻夢」(30章)。

(39) 註(28) 8—9頁。

(40) 柳田国男「妹の力」『定本 柳田国男集』第九巻 (筑摩書房 一九六二) 1—220頁。

(41) 註(1)の[2]。

(42) 註(1)の[2]。

(43) 「ロキの口論」(59—60節)。「ヘルバルズの歌」。「ギュルヴィの幻夢」(44—47章)。いじめ蛇神殺害者ホテルスの背後に、雷神トールの姿が描曳してゐるという推理は、註(30)の

「剣・蛇・雷神」の連合の見地からも、すこぶる重大である。トール対ミズガルズ大蛇の闘争譚は、あまりにも有名であるが、ホズル対バルドルの闘争神話も究極的には、そらくも敗れしてゆく。ひいてはトール対オージン（女と交わり酔酒を飲まんがため「蛇」に変身した神）の対立関係が、当神話に反映されているのだらう。後日展開を期す。

(44) 「キョルヴィの幻夢」(31章)。

(45) E. O. G. Turville-Petre, *Myth and Religion of the North* (Greenwood Press, 1964) p. 184

(46) いの推理が更に成り立つた得たための古ゲルマノ的な「靈力」

又「^{サテ}」の概念はいこでは言及済み。註(9)の拙稿47—48頁。

(47) R. E. Kasko, *Sapientia et Fortitudo as the Controlling Theme of Beowulf, Studies in Philology*, vol. 55 (1958) pp. 423—457. 勇者・王の理念剝きの「劍」(賢、弁舌の才、記憶、予言力、深慮など)と「力」(肉体的な力、勇氣)。いわばホテルスは酷寒の山々を旅する事によって、いれる王者となり得る裏性を帯びたのである。

(48) 註(28)8—9頁。

(49) 寄生木の象徴性については拙稿参照。註(22)、古北欧の「異人」論の「その(1)」91頁。

(50) 他の証拠は『ベーオウルフ』(11回川井一回〇行)。

(みずの・みやあわ／日本大学)